

三月革命期におけるベンケルリートの変容

—『ドイツの手回しオルガンのミューズの響き』の殺人と死—

横 山 淳 子

1. はじめに

三月革命期、自由な言論が許されなかった時代のドイツでは、風刺詩がたくさん出回った。1849年出版の詩集『ドイツの手回しオルガンのミューズの響き』(Musenklänge aus Deutschlands Leierkasten) (以下『ミューズの響き』)は、「歴史ドキュメント」¹⁾と言われ、革命期の社会を風刺的に描き出している。この詩集は、ベンケルリートの形式で書かれ、殺人をテーマとする詩を多く含むことを大きな特徴とする。殺人物語は、市井の人々に向けて広場で歌い語りされていたベンケルザングでも、「モリタート」(Moritat)²⁾と呼ばれて人気があり、民衆の好奇心を駆り立てた。しかし、この詩集では、ロマンチックに展開するはずの恋愛物語さえも、残忍な殺人が繰り返され、果てにはすべての人が死に絶えてしまうような殺人物語に発展する。民衆の好奇心を満たすために語られていた従来のモリタートとは異なる異様さを放つのである。

本論文では、『ミューズの響き』の所収歌を取り上げ、何ゆえにこのような殺人物語が生まれ、「殺人」や「死」が何を表現しているのかを読み解く。これらの詩は、ベンケルリートの形式によって、革命の混乱が続く社会をどのように捉えて描き出し、社会に何を訴えようとしているかについても論述する。

2. 『ミューズの響き』の成立とベンケルリートについて

2-1. 『ミューズの響き』の成立³⁾

この詩集を考案したのは、ライプチヒで出版業を営んでいたゲオルク・ヴィガンツ(Georg Wigand 1808-1858)である。三月革命前期、明らかな政治的活動や自由な主張が禁止された中、作家や芸術家が集う閉鎖的な集

会が文化的に重要な意味を持っていた。アドルフ・ティメ（Adolf Thimme 1857-1945）によると、ヴィガントも、様々な集會に所属して、政治や芸術について意見を交わし、こうした交流が、『ミューズの響き』の考案のきっかけの一つとなった。

ヴィガントは、1836年から交流があった作家ヘアロスゾーン（Karl Herloßsohn 1804-1849）に『ミューズの響き』の編集を依頼した。初版は1849年夏に出版されたが、その後すぐに編集者のヘアロスゾーンは亡くなっている。第2版は、新しい編集者ヴェンク（Woldemar Wenck 1819-1905）の下で内容を大幅に変えて1850年に出版され、1884年の第16版まで版を重ねた。本論文では、三月革命期の「歴史ドキュメント」の性格を強く持つ初版を考察の対象とする。⁴⁾

『ミューズの響き』は、「抒情的（Lyrisches.）」と「叙事的（Episches.）」の2部構成で、それぞれ10編と16編が所収されている。「殺人」や「死」がテーマとなる詩は、「叙事的」に集中しており、14編にのぼる。殺人物語を多く含むこの詩集をヴィガントが考案したもう一つのきっかけは、風刺雑誌『フリーゲンデ・ブレッター』（Fliegende Blätter）に掲載された二つの殺人物語だったとティメは推測している。⁵⁾

一つ目は、『フリーゲンデ・ブレッター』213号（1849年）に掲載された「クンツの殺人の歌」（Das Lied vom Kunzenmord）である。恋人をだまして斧で殺し、金を奪って逃げ去った女の物語で、女は最後に「娘たちよ、自分を大切に／男に誘惑されないように／さもないと私になるわよ」と言い放って処刑される。墮落した女による倫理観の崩壊が描かれている。

二つ目は、『フリーゲンデ・ブレッター』218号（1849年）に掲載された「ドゥアラッハの殺人犯」（Der Mörder von Durlach）である。作詩は、後に『ミューズの響き』の編集者となったヘアロスゾーン、イラストは、ムッテンターラー（Anton Muttenthaler 1820-1870）による。モロッコにて人肉を料理して富を得ようとする男の異様な物語で、最後は「御覧なさい／お高貴な生まれのキリストよ／この状況下では／食欲さがなんと恐ろしいことか」と締めくくられる。キリスト教の力が及ばない世界の異様な光景を語り、神に対する批判や挑戦が込められている。

いずれもベンケルリートの形式で語られ、「クンツの殺人の歌」の詩の前には、手回しオルガンを回してベンケルザングを披露する一座のイラスト

トが挿入されている。『ミューズの響き』にも、手回しオルガンを回す吟遊詩人のイラストが2か所に挿入されており、所収歌がベンケルリートのパロディーであることを強調している。ベンケルリート形式の風刺詩は、『フリーゲンデ・ブレッター』をはじめ、当時多く出回っており、『ミューズの響き』の詩を分析するうえでも、この形式が重要な意味を持つと考えられるため、次項ではベンケルリートの特徴について簡単にまとめておく。

2-2. ベンケルリートについて

17世紀頃、ベンケルザングと呼ばれる民衆文化が登場した。これは、「語り」と「歌」と「絵」が一体となった大衆的な総合芸術で、ベンケルゼンガーと呼ばれる旅芸人が、大きな掛図の絵を一コマずつ棒で指しながら、物語を聴衆に語りかけ、歌いかけた。⁶⁾特に初期は、キリスト教的な性格が強く、物語のテーマも主に奇蹟、聖地巡礼、聖者物語などであった。しかし次第に、恋愛物語、殺人事件、自然災害なども扱われるようになり、最盛期を迎えた19世紀半ばには世俗的ベンケルザングが宗教的ベンケルザングを上回った。

娯楽が少なかった時代、民衆はベンケルゼンガーの歌い語りに好奇心を駆り立てられ、楽しみながら、興奮しながら、時には涙を流して引き込まれたという。最後は大抵、道徳的でキリスト教に基づく教訓で締めくくられていたため、民衆教育的な面も持ち合わせ、民衆の意識形成にも大きな影響を与えていた。

ベンケルゼンガーは、物語の内容を印刷したビラやパンフレットを売って生計を立て、民衆は、それを購入して物語の余韻に浸った。ビラやパンフレットは現在に至るまで相当量が残されており、あまり記録が残されていないベンケルザングの内容を窺い知ることができる。そこには、散文の物語と、最後に、歌詞が掲載されており、ベンケルザングの中で歌われていたこの歌詞の部分がベンケルリートである。⁷⁾ベンケルリートは、「前置き」や「民衆への呼びかけ」で始まり、複数の詩節で物語や事件を描写した後、最後は教訓や説教で締めくくられている。大抵、よく知られた宗教歌や民謡のメロディーで歌われ、ビラやパンフレットを購入した聴衆は、自分でもすぐに歌う事ができた。

19世紀半ばになると、このベンケルリートを模倣した政治的、風

刺的な詩が作られるようになった。「ベンケルザングパロディー」(Bänkelsangparodie)とも呼ばれるこれらの詩は、政治や社会への批判を匿名で民衆にもたらそうとするもので、⁸⁾『ミューズの響き』の詩もこれに含まれる。民衆に語りかけ、最後に教訓を述べるという形式を伝統的なベンケルリートから継承しているが、その役割や効果には大きな違いがある。本論文では、伝統的なベンケルリートと、その形式を利用した風刺詩を比較する事で、民衆の歌文化であったベンケルリートが時代と共にどのように変化し、受け継がれていったかにも言及する。

19世紀に作られたベンケルリート形式の風刺詩にはイラストが付けられ、様々な歌集や風刺雑誌に匿名で掲載された。中でも、1844年から1944年までミュンヘンのブラウン・ウント・シュナイダー社(Braun & Schneider)から出版された風刺雑誌『フリーゲンデ・ブレッター』⁹⁾は、多くの風刺詩や風刺画を掲載している。『フリーゲンデ・ブレッター』から『ミューズの響き』に転載された作品もあり、本論文でも両者の関連について一部の作品で言及する。『ミューズの響き』は、政治的関心が高まり、風刺詩が重要な意見表明の手段となる中、社会情勢や他の雑誌から影響を受けて生まれたのである。次章からは、実際に作品を分析して、この詩集が社会に何を訴えようとしているのかについて論じる。

3. 作品分析 <恋愛物語>

本論文では、詩集『ミューズの響き』の殺人物語を考察の対象としているが、その多くは恋愛物語として始まる。恋愛物語は、ベンケルザングでも頻繁に語られ、特に、この世で恋を成就できない男女が死後の世界で結ばれる悲劇的な物語は最も人気があった。¹⁰⁾ シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』が古今東西、人の心を惹きつけるように、「愛」と「死」は、物語をロマンチックにする格好の材料である。しかし、この詩集の恋愛物語は、従来のように抒情的に語られるのではなく、残忍な殺人物語へと展開していく。「死」は、恋愛物語をドラマチックに仕立てるのではなく、全く別の意味を持つようである。『ミューズの響き』の22番目の詩「最も真実の初めは砂糖のように甘いですが最後は悲劇的で残酷な物語」(Höchst wahrhaftige anfangs zuckersüße am Ende aber tragisch= scheußliche Geschichte)では、「愛」と「死」の異様な関係が最も明瞭に表現されていると思われる。

るため、本章での考察対象とし、「死」の意味について考える。

3-1. 伝統的なベンケルリート

まずは、伝統的なベンケルリートの恋愛物語における「死」の意味を確認する。

1815年1月3日、ウィーンの新新聞『オーストリア・ベオバハター紙』(Der Oesterreichische Beobachter) に若い男女の心中事件が掲載された。

フランクフルトの商家に仕えていた若い男女が恋をし、彼女は妊娠した。男はギャンブルで財産を増やそうとしたが、逆に全財産を失ってしまう。絶望の淵に立たされた男は死を決意し、彼女も一緒にピストル自殺を図ったという内容である。

この事件には、未婚の女性の妊娠、ギャンブルによる破滅、恋人への忠誠心、ピストル自殺など、民衆の興味を駆り立てる要素がたくさんある。ベンケルゼンガーが、早速この事件を題材にベンケルリートを作り、民衆に歌い聞かせたところ大盛況であった。この歌はすぐにピラ刷り¹¹⁾として発売され、各地の年の市で歌われることとなった。¹²⁾

このピラ刷りには、上記の新聞記事と全20詩節のベンケルリートが掲載されている。男の名がエドゥアルト、女の名はクニグンデとされ、エドゥアルトが貯蓄を失ったことを彼女に告げた後、お腹に子を宿しているクニグンデの苦悩が描かれる。エドゥアルトは、次のように語り、死を決意する。「ピストルが私を解放するだろう／重くのしかかる不幸ゆえに／私の喜びは失われ／今日にも死のう。」この言葉から、エドゥアルトが「死」を「苦しみからの解放」と捉えていることが分かる。クニグンデは、「この世ではあなたの妻になれず」、「父親のいない子」と共に惨めに生きることではできないと、エドゥアルトと一緒に死ぬ覚悟を決める。二人は、「この人生から逃げ出す」決意をすると、森の中で命を絶った。「ここで彼らは一つになって死に絶え」とあるように、この世で結ばれなかった二人の愛は死後に成就された。二人の死は、生前に親交のあった皆から悼まれることとなり、ベンケルリートは最後まで、若い男女への共感を誘う描き方をしている。

ただし、ベンケルリートは男女の心中物語として感動的には終わらず、冒頭3詩節と最終詩節に、前置きと教訓がある。最終詩節には「彼らが神

を信じていたならば／神はすべての人を愛してくれたのに」とあり、これと呼応する前置きでは、「神のご加護だけが私たちが歓喜の海へと誘う」「純粋な美德だけが愛の中に価値や重みを見出せる」「地位や富が人生を豊かにするのではない」等と語られる。ベンケルゼンガーは、あくまでも宗教的立場から物語を捉え、神を信じることが愛を成就させ、地位や富が大事なのではないと説く。

その後、「エドゥアルトとクニグンデ」は一つの文学テーマとなり、ヨハン・フォーグル (Johann Vogl 1802～1866) の同名の詩、ユリウス・フランク (Julius Frank 1822-1908) の同名のリブレット¹³⁾ (1850年頃)、ゴトフグリュエネッケ (Ludwig Gothov-Grünecke 1847-1921) の同名のオペラ (1869年初演) などが作られた。¹⁴⁾ ヨハン・ネストロイ (Johann Nepomuk Eduard Ambrosius Nestroy 1801-1862) の喜劇『悪霊ルンパチヴァガブンドゥス』 (Der böse Geist Lumpacivagabundus oder Das liederliche Kleeblatt) (1833年初演) では、二人の名前だけで構成された歌が登場する。1845年の『フリーゲンデ・プレッター』5号には同名の風刺詩が掲載され、『ミューズの響き』の22番目の詩も、その影響を受けた風刺詩である。¹⁵⁾

3-2. 『フリーゲンデ・プレッター』5号 (1845年) 「エドゥアルトとクニグンデ」 (Eduard und Kunigunde)

詩は、フリードリヒ・シュナイダー (Friedrich Schneider 1815-1864)、イラストは、カスパー・ブラウン (Kaspar Braun 1807-1877) による。エドゥアルトとクニグンデの甘い恋で始まるこの詩は、前項で扱ったベンケルリートの風刺と考えられるが、内容は大幅に変更されている。

幸せに過ごしていた恋人エドゥアルトとクニグンデは、主君フェルナンドによって突然殺害される。二人の殺害を後悔したフェルナンドは自害し、騎士と従者も主君フェルナンドを真似て次々に自害する。かつてロマンチックに語られていた「エドゥアルトとクニグンデ」の物語だが、ここでは殺人事件と自殺が連鎖し、最後には登場人物全員が死ぬ異様な展開となる。

最初のベンケルリートでは、奉公人のエドゥアルトとクニグンデが恋をし、共に命を絶つ物語だったのに対して、ここではエドゥアルトとクニグンデが騎士と高貴な婦人であることが、イラストから分かる。この二人を

主君が殺害する動機は定かではないが、主君は短刀で自らを刺した後、「お前たちの絆に私も入れてくれ」と叫んでいることから、嫉妬が動機のように考えられる。貴族階級の物語にすることで、古い身分制度の中でもこのような異様な事件が起こり、古い社会制度にも綻びが生じていることを風刺している。

男女の恋が切なくロマンチックに描かれていたかつてのベンケルリートが、若い男女の殺害と自殺の連鎖という物語に書き替えられ、ロマンが失われて殺伐とした現状をも皮肉っている。最終詩節は、次のような警告で締めくくられる。「お聞きなさい、木立の中のため息を！／青ざめた亡霊が行脚する／復讐の恐怖の場へ／嘆きながら、輪になる／エドゥアルトとクニグンデ。」死者の魂は天に召されることなく彷徨い、復讐の連鎖と恐怖はいつまでも繰り返されている。殺人や自殺がいつまでも続き、恐怖を抱き続けねばならない革命の現状に対する警告である。

3 - 3. 『ミューズの響き』 22 番「最も真実の初めは砂糖のように甘い
最後は悲劇的で残酷な物語、二人の恋人エドゥアルトとクニグンデとい
う名の」(Höchst wahrhaftige anfangs zuckersüße am Ende aber tragisch=
scheußliche Geschichte zweier Liebenden Eduard und Kunigunde geheißen)

この詩のタイトルは、3 - 1 章で言及したピラ刷りのタイトルを皮肉ったもので、以下の説明が続く。

「どうしてその様な事が暗黒の昔、人々がまだ無知だった時代に起こったのか、私たちの特に啓蒙された時代の警告や楽しみのために紹介され、たくさんの絵で飾られる、Jodokus Buchsbaumerl によって」

「暗黒の昔、人々がまだ無知だった時代」と「私たちの特に啓蒙された時代」を対比させ、「警告や楽しみのために」紹介するというこの文言に、作者のシニカルな立場が強く表れている。詩とイラストの作者は、ルートヴィヒ・リヒター (Adrian Ludwig Richter 1803-1884) だが、木版画の道具であるツゲ (Buchs) を暗示するペンネーム „Jodokus Buchsbaumerl“ を用いている。

「その様な事」は、3 - 1 章で扱ったベンケルリートの内容を指すと考えられる。キリスト教が絶対的なものとされ、自殺がタブーとされた時代に、「盲目的な情熱によって惑わされた」¹⁶⁾ 男女の心中事件が起きてしまっ

たことを皮肉っぽく述べている。恋がロマンチックに語られ、キリスト教の教えに則った教訓が添えられていた「昔」の物語を、「私たちの特に啓蒙された時代の警告や楽しみ」のために語るというのである。

騎士エドゥアルトは伯爵令嬢クニグンデを先祖代々の城から連れ出して二人で逃げ出す。城の看守から報告を受けたフーゴー伯爵は苦痛と怒りに満ちて二人を追いかける。二人が晩餐会を開いていたところに、伯爵が到着したが、ドアが閉まったままだったので、伯爵はドアを貫通させて、ガチョウ、団子、クニグンデ、エドゥアルトを串刺しにしまった。

この物語は、前項の風刺詩と同じく、愛を貫こうとする男女の恋愛を描くかのように始まるが、恋の苦悩や喜びと言った抒情的な描写はなく、悲惨な殺人物語に発展する。前項の風刺詩では、主君とクニグンデの関係は特定されていなかったが、ここでは父親である伯爵フーゴーが娘を殺害するため、異様さが増している。フーゴーは、娘と恋人を「苦痛と怒りに満ちて」同時に突き刺し、この残酷な結末に、同情や哀れみを感じる余地もない。

父親である伯爵フーゴーは、身分や家系を守ろうとしているのだろうが、そのために娘を殺してしまっただけでは本末転倒である。貴族社会の矛盾や限界を描き、これが、「啓蒙された時代」の警告になるとはシニカルである。啓蒙された時代、知識を得た人々は自由や民主主義を掲げ、より良い時代を目指して革命を起こしたが、そこにあったのは恋やロマンとは程遠い、殺伐とした時代である。昔の物語を風刺しながら、自分たちの時代もまた、同じように矛盾や限界を抱えて、殺人が繰り返されていることを警告している。

さらにこの詩は、「昔」の他人の悲劇は面白いと言わんばかりに皮肉り、ユーモアを織り交ぜて「楽しみ」としている。ドア、ガチョウ、団子、クニグンデ、エドゥアルトを串刺しにするという滑稽でグロテスクな表現をはじめ、第2詩節以降の全詩節に風刺的なイラストがある。イラストの下には散文で説明書きがあり、肝心の詩の内容は全詩節で以下のものに統一されているのである。

「エドゥアルトとクニグンデ／クニグンデ、エドゥアルト／エドゥアルトとクニグンデ／クニグンデ、エドゥアルト」

この名前の繰り返しは、ネストロイの喜劇『悪霊ルンパチヴァガブンドゥ

ス』で歌われていたものである。この歌が劇中で持つ効果について、里村和秋氏は次のように論じている。¹⁷⁾ この歌は、劇中に登場する三人の主人公の一人、クニーリームによって歌われる。クニーリームは、惑星の衝突によって、人間の拠って立つ地盤が根底から覆り、全てが一瞬にして無意味に帰すという妄想に悩まされていた。「素晴らしい歌」(ein superbes Lied) と称して歌いだすにも関わらず、その期待がナンセンスな歌によって裏切られることで滑稽さが引き出される。そして、エドゥアルトとクニグンデの名前が繰り返されればされるほど、この歌の反復の意味は、現実による歯止めがきかずに無限循環の底なしへと引き寄せられていく。

『ミューズの響き』における、この名前の繰り返しも、同じような「無限循環」の効果を持つと考えられる。つまり、「暗黒の昔」から「啓蒙された時代」へと進化したはずだが、理不尽な殺人ばかりが繰り返されているというこの詩において、同じ詩句の繰り返しは、歯止めがきかずに悲惨な状況が無限に深まっていく危機感を煽る。

以上で考察してきたように、かつて抒情的に語られた恋愛物語は、残忍な殺人物語へと書き替えられ、「死」はもはや男女の愛を成就させるようなドラマチックな要素ではなく、悲惨な現状を映し出すものへと意味が変化している。この異様な物語は、殺人が繰り返される惨状が無限に続けば、全ての人が死に絶えてしまう無残な結末を招きかねないとの警告である。次章では、この凄惨を極めた状況を描く詩を扱い、「殺人」や「死」によってさらに描き出される惨状について論述する。

4. 作品分析 <登場人物全員の死>

3-2章で扱った『フリーゲンデ・ブレッター』の「エドゥアルトとクニグンデ」は、登場人物全員が死んでしまうという異様な展開だが、これは、『ミューズの響き』の殺人物語の大きな特徴の一つでもある。

15番目の詩「バラード」(Ballade)は、『フリーゲンデ・ブレッター』16号(1845年)に掲載されていた全3詩節の風刺詩「バラード」(Ballade)に、新たに第4詩節を加えた詩で、登場人物全員が死ぬこととなる。この作品を取り上げて、これらの「死」が社会に何を訴えようとしているのか考察する。

第3詩節までは、若者二人を率いた騎士フーゴーが「激しく怒って (in

heftigem Zorn) 馬で駆け、自分をだました小娘とその恋人を刺し、続けて「激しく怒って」自分自身をも刺す、という内容である。恋人同士で二人が殺害され、殺害した者も自害するという点は、3 - 2章の「エドゥアルトとクニグンデ」と共通している。ただし、3 - 2章の「エドゥアルトとクニグンデ」では、主君がエドゥアルトとクニグンデを殺す動機ははっきりと書かれていなかったが、この詩では、小娘がフーゴーをだましたと明確にされており、「激しく怒って」も4回繰り返されている。つまりここでは、裏切りへの復讐によって、騎士としての自尊心を失った姿が風刺されている。

『ミュースの響き』で新たに付け加えられた第4詩節では、残された若者二人が「これ以上失うものがないので」、「怒りもなしに (ganz ohne Zorn)」互いを刺し殺す。この二人の死は、第3詩節までの三人の死とは異なる不可解なものであり、この死に理由付けを行うのであれば、仕えていたフーゴーが亡くなり、信じるもの、頼るものを失ってしまったからだと考えることができる。

それは、ある意味近代的な考え方でもある。身分制度や宗教的道徳が絶対的なものだった時代、人々は個々に生きる意味などを考えることもなく、逆に生きる意味を見失うこともなかった。しかし、啓蒙された時代、人々が知識を得て、自由に生きようになると、それは絶望や虚無感を引き起こし、生きる意味を見失う事にもなる。近代的な社会を求めて革命まで起きているが、現実には満たされていない世の中を皮肉り、若者が自立して生きていける新しい社会の必要性を訴えている。

最後の詩節で、伝統的なベンケルリートのように教訓が語られるどころか、何も残されていないという状態もシニカルである。ティメは、この二人は「全員死ぬために」死んだと指摘している。¹⁸⁾「全員死ぬ」という究極の状態でもって表現しなければならないほどに、この時代を支配する絶望感、虚無感は危機的なものであったのだろう。

さらにこの詩では、騎士が小娘とその恋人を殺害して自害し、残された若者は互いを同時に刺し殺す。ここには、他殺、自殺、互いに殺し合うという3つの殺害方法が描かれている。登場人物全員が死ぬ詩では、このように様々な殺害が連鎖して起こるのである。

特に自殺については、ゲーテの書簡体小説『若きウェルテルの悩み』(Die

Leiden des jungen Werthers) (1774 年発表) が大論争を巻き起こし、その風刺詩が『ミューズの響き』にも所収されている。¹⁹⁾ 自殺をタブーとするキリスト教において、自殺は、簡単には容認されない重大なテーマである。しかし、『ミューズの響き』の殺人物語では、自殺は殺害方法の一つとして捉えられ、キリスト教の秩序はもはや大きな問題ではなくなっている。キリスト教の支配から脱却した新しい社会とも言えるはずだが、倫理観の喪失は、無残に荒廃した世界をもたらしたただけであった。

『ミューズの響き』には、登場人物全員が死ぬ詩は、他にも 4 編ある。²⁰⁾ これらもすべて、恋愛物語として始まりながら残忍な殺人物語へと発展する。騎士や伯爵、伯爵令嬢が登場する点も共通している。これまでに考察してきた詩と同じく、貴族社会を風刺しながら、自分たちの社会に警告を発し、新しい社会の必要性を訴えているようである。

さらにこの詩集は、政治をテーマとした詩を 4 編含み、ここから編者の革命に対する考え方を窺い知ることができる。次章では、政治をテーマとした詩を取り上げて、当時の政治的状況を考察に取り入れつつ、残酷な殺人物語が生まれた革命の状況に焦点を当てる。

5. 作品分析 <政治的風刺詩>

『ミューズの響き』に所収された 4 編の政治的風刺詩はいずれも、革命の失敗を描く。つまり、保守的な体制や権力者ではなく、革命の状況や革命家を風刺し、革命のあり方に疑問を投げかけている。本章では、その特徴が明瞭で、「死」が主要テーマにもなっている「ヘッカーの新しい歌」(Ein neues Lied vom Hecker) (1848 年成立) を取り上げる。²¹⁾ ヨハン・シュミット (Johann Schmitt) のペンネームで発表されたこの詩の作者はナードラー (Karl Christian Gottfried Nadler 1809-1849) で、南ドイツで起きた一連の暴動とその指導者をベンケルリート形式で嘲笑的に描いている。

まずは、当時の南ドイツ諸国の状況とヘッカー (Friedrich Karl Franz Hecker 1811-1881) の立場について簡単にまとめておく。²²⁾

1848 年の革命は、ウィーン、ベルリン、フランクフルトを中心に、各都市で独自の経過をたどったが、その先駆を成したのが南ドイツ諸国であった。パリの二月革命の報道が届いた直後、マンハイムで一つの人民大会が開かれた。出版の自由、陪審裁判、人民武装、ドイツ議会の設立の四

項目が採択されたが、その後顕著になったのは、穏健派と急進派の対立である。当時、革命に賛同していた人々の多くは、憲法と民族統一を望んでいたが、依然、立憲君主派であった。これに対して、急進派に属したヘッカー等は、共和国の設立を目指し、両派の溝は深いものであった。

結局、ヘッカーは、国民議会を準備する五十人委員会に選出されず、バーデンに帰還したが、南ドイツ一帯では多くの支持者を持ち、英雄と見なされた。ヘッカーが蜂起を決意したきっかけは、仲間の共和主義者フィックラー (Joseph Fickler 1808-1865) がカールスルーエで捕縛された事であった。バーデン政府を相手にした「ヘッカー蜂起」は失敗に終わったが、その後も南ドイツでは共和国の設立を目指して革命暴動が相次いだ。

「ヘッカーの新しい歌」は、第1～8詩節 (ヘッカー蜂起)、第9～12詩節 (フライブルクでの戦い)、第13～16詩節 (ドッセンバッハの戦い)、第17詩節 (吟遊詩人の語り) と、大きく4部に分けられ、南ドイツ諸国での一連の暴動を扱う。

第1～4詩節は戦いに挑むヘッカーを描写する。ヘッカーは、「民衆を目覚めさせて」扇動し、武力をも厭わない。ナードラーの原版には風刺画が挿入されており、その中央には勇敢な姿の「偉大なヘッカー」が大きく描かれている。

第3、4詩節では、ヘッカーはドンドンと太鼓を打ち鳴らし、「地位の低い人も高い人もみんな」がヘッカーに歓声をあげる。ヘッカーの人気は、力強い言葉や演説、信念を貫く情熱的な振る舞いにあったと言われるが、²³⁾ それが太鼓を打ち鳴らす姿で嘲笑的に表現されている。嘲笑は、太鼓の音に付いて行く人々にも向けられており、民衆が主導者の言動に惑わされてしまう事への危惧や批判が読み取れる。

第5～7詩節が、ヘッカー軍とバーデン政府軍の交戦場面である。「高貴なゲーゲルン、勇敢なヘッセンよ」と呼びかけられているのは、ホルナウ出身のフリードリヒ・フォン・ゲーゲルン (Friedrich Balduin Ludwig Freiherr von Gagern 1794-1848) である。ゲーゲルン家は、13世紀に遡る古い家系の貴族であるが、フリードリヒは二人の弟、ハインリヒ、マックスと共に、ドイツの統一と自由のために力を注いだ。²⁴⁾ リベラルで民主的な考えを持っていたゲーゲルンが指揮官に選ばれたことは、強硬な措置をとりたくないという政府の意向の表れでもある。

ゲーゲルンはず、ヘッカーとの交渉を試み、武器を置くように要求した。ヘッカーもまた、交渉に応じようとしたが、着地点を見い出せず、交戦が始まって真っ先に倒れたのはゲーゲルンだった。その直前にヘッカーが、「ドイツ人の兄弟を撃つな！」と叫んだとの証言もあるが、士気を奮い立たせた政府軍の勝利に終わり、ヘッカー軍は退散した。この戦いでは、他にも両軍の兵士少なくとも 11 人が犠牲となり、ゲーゲルンを初めとする犠牲者の死には、無念さが残るばかりである。ヘッカーはと言えば、農民に変装してスイスに逃亡し、バーデンの政治舞台から永遠に姿を消すこととなった。

第 8 詩節には、カイザー、ヴァイスハール、シュトゥルーヴェ、ペーターらが「素敵で自由なスイス」へと追放されたとある。ヘッカーの逃亡には言及されず、第 9 詩節は「ヘッカーよ、教えておくれ、どこにいるのだ？／何もしないのか？」と始まる。「偉大なヘッカー」を描く詩でありながら、詩の後半にヘッカーは登場しない。

第 9～12 詩節は、フライブルクでの戦いである。ラングスドルフ (Georg von Langsdorff 1822-1921) やジーゲル (Franz Sigel 1824-1902) 率いる革命軍がフライブルクを攻めるが、銃撃戦の結果、「共和国は消えた！」(第 11 詩節)。第 13～16 詩節のドッセンバッハの戦いでも「共和国は消える！」(第 15 詩節) と繰り返される。ヘッカーの逃亡後も、共和国のための戦いは続いたが、無数の兵士が犠牲となった末、共和国は消えていったのである。「ヘッカーの精神」(第 14 詩節) は残されて根強い影響力を持ったが、ヘッカーを崇拜して戦い続けることにより生じている惨状を詩人は浮き彫りにしている。

第 15、16 詩節には、ドッセンバッハの戦いを主導したヘルヴェーク (Georg Friedrich Rudolf Theodor Andreas Herwegh 1817-1875) が逃げ出す様子が描かれている。ヘルヴェークは二月革命の際、パリに滞在していたが、亡命ドイツ人と共にドイツ民主軍団 (Die deutsche demokratische Legion) を立ち上げ、ドイツに共和国を打ち立てるために武装してライン川を越えてきた。バーデンの共和主義者らが敗北を喫した後も勇敢に戦ったが、自分の身に危険が迫ると夫婦で農民の姿に変装してスイスへと逃れていった。²⁵⁾

主導者ヘルヴェーク逃亡後の戦場を、詩人は次のように描写する。「シ

ンメルプフェニヒは刺殺され／たくさんの大鎌が壊れ／たくさんの人が射殺された／すべての名を挙げられないほどの人が」ヘルヴェークの計画に賛同する労働者は多く、約700人が参戦したが、その半数はバーデン軍に捕らえられたと言われている。²⁶⁾

最後の第17詩節は、吟遊詩人の語りである。「これはバーデンで起きた／倒れず、逃げなかったものは／軍隊につかまり／ブルッフザールで藁の上に寝かされた／私はヘッセンの吟遊詩人／バーデンを忘れられず／共に戦ったものが／この歌を作りました。」

この詩は、冒頭部分でセンセーショナルに勇敢なヘッカー像を描き、ヘッカーを崇拜する民衆たちの共感を誘う。吟遊詩人は、世間のヘッカーに対する評価に寄り添いつつ、ヘッカーを盲信して戦い続けた者たちの無数の命が犠牲になっている惨状を客観的に捉え、暴力的な革命が続くことに対して警告している。

ヘッカーは、革命を熱望していたものの、総合的な知識や政治的な戦術をもってはいなかった。²⁷⁾ヘッカーに限らず、多くの革命家が十分に熟した思想や確信的な展望を持たないままに、無謀な企てを行っていた。²⁸⁾盲目的に新しい時代を追い求めた人々は命を落とし、あるいは、真の主導者もなく進むべき道に迷っていた。この詩に描かれる「死」は、そのような社会の行き詰まりや不条理の結果である。

前章の考察によると、『ミューズの響き』の殺人物語は、殺人が繰り返される「今」の時代、新しい時代を求めていながらも絶望と虚無感に支配される危機的状況への警告と読むことができる。詩集では、これらの殺人物語の後に、実際の革命への風刺詩が4編所収されることで、一連の革命は殺人の連鎖と同じであるという強いメッセージを持つ。『ミューズの響き』の詩は、吟遊詩人による、シニカルで、時にはユーモアを交えた語りであるが、暴力的な革命に対して鋭い批判の眼差しを向けている。

6. 最後に

マルクス (Karl Marx 1818-1883) とエンゲルス (Friedrich Engels 1820-1895) は、革命前夜の閉塞状況を「ドイツのみじめさ」と表現した。これについて、良知力氏は、次のように解説している。ブルジョアジーそのものが階級として一人前ではないから、その胎内に育ちつつあるプロレタリ

アートも未熟児であった。いわば、どの身分も、どの階級も、時代の矛盾を感じながら、しかも八方ふさがりだったのである。近代へ向けて古い社会を脱け出ようにも、脱け出る窓が見つからない状況であった。²⁹⁾

革命を望む者同士でも、目指すべき方向性は異なり、人々の心は分断されていた。人々は、進むべき道を見い出せずに迷い、殺人が繰り返される泥沼に陥っていたのである。そんな時代の人々の心を捉えたのが、ベンケルリートであった。『ミューズの響き』の風刺詩は、大量の犠牲者を出し続ける革命の惨状を描き出し、警告を発している。しかし、革命を否定してはいない。凄惨な出来事を直接的に批判したりもせず、過去と現在を比較しても、その是非を語ってはいない。新しい時代を希求する民衆の想いを尊重しているのであり、これこそがベンケルリートの手法である。誰もが迷っている時代に、詩人は民衆の心に寄り添いつつ、時代の変化を受け止めて、問題提起をしているのである。

ベンケルリートは、時代の変化に伴って社会的出来事を扱うようになり、よりシニカルで風刺的な語り方へと変化した。しかし、かつて民衆の娯楽であり、教育的な役割を担っていた、その精神は引き継がれている。革命が求められている時代に、従来の道徳観はもはや通用せず、打開策も見出せないが、警告によって気づきを与え、民衆を教え導いたのである。

ドイツでは古くからたくさんのリート（歌）が歌い継がれ、ドイツ音楽の発展にも貢献してきた。これらのリートは、社会や歌い手の変化に順応しながら、歌詞やメロディーを少しずつ変化させて親しまれてきたものである。社会の変化を受け入れながらも民衆の心に寄り添い続けてきたベンケルリートもまた、ドイツの長い歴史の中で歌い継がれてきたリートのあり方の一つと言えるであろう。

註

- 1) neu herausgegeben von Thimme, Adolf: Musenklänge aus Deutschlands Leierkasten, Meersburg am Bodensee und Leipzig 1936. Zweiter Teil S. 39.
- 2) 19世紀前半にベンケルザングのパロディーとして、殺人物語がたくさん作られた中、1841年にはじめて用いられた語であるが、伝統的なベンケルザングにおいても殺人をテーマとしたものを「モリタート」と呼んでいる。

- 3) この詩集の成立については、アドルフ・ティメの以下の論文で詳細に記述されており、本項はこれを参照してまとめた。
Thimme, Adolf: Georg Wigand ein Göttinger und die Musenklänge aus Deutschlands Leierkasten, Göttingen 1935.
- 4) 本論文の考察では、以下のファクシミリ版を使用した。
neu herausgegeben von Thimme: Musenklänge. Erster Teil Faksimiledruck der Ausgabe 1849.
- 5) Thimme: Georg Wigand. S. 12.
- 6) ベンケルザングについては、奈倉氏が以下の文献で詳細に論じており、本論文ではこれを参照、引用してまとめた。
奈倉洋子『ドイツの民衆文化 ベンケルザング 広場の絵解き師たち』彩流社、1996年。
- 7) ベンケルリートについては、下記の研究を参照してまとめた。
Pezoldt, Leander: Bänkelsang, Stuttgart 1974.
Pezoldt, Leander: Bänkellieder und Moritaten aus drei Jahrhunderten - Texte und Noten mit Begleit-Akkorden, Frankfurt am Main 1982.
- 8) ベンケルリートは、宗教的、道徳的な性格を利用し、教訓を語っているかのように見せかけることで、検閲を逃れる狙いもあった。これについて、以下の拙論で論じている。
Satire in der Zeit der Märzrevolution — Parodien des Bänkelsangs in den „Musenklängen aus Deutschlands Leierkasten“ — 『リュンコイス』第54号、桜門ドイツ文学会、2021年、18-32頁。
- 9) 1929年に雑誌 „Meggendorfer-Blätter“ と統合された後は、 „Fliegende Blätter und Meggendorfer-Blätter“ というタイトルで刊行された。
- 10) Pezoldt: Bänkelsang. S. 66.
- 11) Eduard und Kunigunde, oder: die beyden unglücklich Liebenden aus blinder Leidenschaft irre geleitet - Eine wahre Begebenheit für junge Leute zur Warnung dienend, welche sich bey Hanau ereignet hat. Wien 1815.
- 12) Hrsg. von Nötzold, Fritz: Krokodilstränen. Parodistische Bänkelballaden, Moritatenlieder, Frankfurt, Hamburg 1970. S. 13, 15.
- 13) Frank, Julius: Eduard und Kunigunde, oder: Eine Dorfgeschichte - Vaudeville-Posse

in 1 Akt, Berlin ca. 1850.

- 14) グスタフ・キューン社 (Gustav Kühn) にて「エドゥアルトとクニグンデ」と題する 12 コマのイラストと詩のリトグラフ (ビルダーボーゲン) が印刷されている他、ベルリンのヨーロッパ文化博物館 (Museum Europäischer Kulturen) には同名のタイトルの 9 コマのイラスト等もある。(所蔵整理番号: D (32 N 6) 367/1973)
- 15) 風刺雑誌『クラデラダツチュ』(Kladderadatsch) 1861 年 54 号 (11 月 24 日発行) にも同名の風刺詩がある。
- 16) 注 11 参照。
- 17) 里村和秋「ヨハン・ネストロイの『悪霊ルンパチヴァガブンドゥス』について - 言葉遊びが意味するもの -」『東北ドイツ文学研究』39 巻, 東北大学文学部・ドイツ文学研究会, 1995 年, 77-78 頁。
- 18) Thimme: Georg Wigand. S. 21.
- 19) 『若きウエルテルの悩み』の自殺を巡る議論については、以下の拙論で論じている。

„Liebe und Selbstmord“ in der volkstümlichen Gesangskultur – Von der Rezeption von Werthers Selbstmord bis zur Etablierung eines modernen Ichs – 『ゲーテ年鑑』第 57 巻, 日本ゲーテ協会, 2021 年, 123-139 頁。
- 20) ・ 16 番目の詩「ウーロホ, 悪党 バラード」(Uroch, der Böse. Ballade)
・ 18 番目の詩「恐るべし 私による 2 部構成のバラード」(Entsetzlich. Eine Ballade in zwei Theilen von Mir)
・ 19 番目の詩「身の毛のよだつ描写 - どうやって伯爵が長女を殺したか」(Schauderhafte Beschreibung, wie ein Graf seine älteste Tochter ermordet)
・ 20 番目の詩「身の毛のよだつバラード - 恐ろしい三部」(Fürchterliche Ballade in drei schauerhaften Abtheilungen)
- 21) 政治的な詩のうち, 23 番目の詩「フィエスキ, ひどい悪人」(Fieschi, der grause Bösewicht) と 24 番目の詩「暗殺」(Das Attentat) については, 注 8 の拙論で扱った。
- 22) 以下の文献を主に参照, 引用してまとめた。

林健太郎『ドイツ革命史 1848・1849 年』山川出版社, 1990 年。
- 23) Vögely, Ludwig: „Hecker hoch! Dein Name schallet. . .“ Friedrich Hecker zum

100. Todestag am 24. März 1981. In: Badische Heimat - Zeitschrift für Volkskunde, ländliche Wohlfahrtspflege, Heimat- und Denkmalschutz, Nr. 61, Karlsruhe 1981. S. 85-103, hier S. 93.
- 24) Broschüre hrsg. vom Magistrat der Stadt Kelkheim (Taunus) : Die Freiherren von Gagern - Kelkheimer Historische Sehenswürdigkeiten, Kelkheim (Taunus) . S. 4.
- 25) 可知正孝『詩人ヘルヴェークとハイネ』鳥影社, 2011年, 11頁。
- 26) 中野和朗「詩と政治 三月革命の詩人 ゲオルク・ヘルヴェーク」『人文科学論集』第6号, 信州大学人文学部, 1972年, 90頁。
- 27) Eisele, Albert: Um das Gefecht auf der Scheideck am 20. April 1848. In: Das Markgräflerland - Beiträge zu seiner Geschichte und Kultur, Jahrgang 29 Heft 2, Schopfheim 1967. S. 13-16, hier S. 14.
- 28) 革命期の社会を分析し、マルクス主義を打ち立てたマルクスやエンゲルスも、ヘッカーやヘルヴェーク等ラディカルな革命家の思想や行動に対して、低い評価しか与えていない。(林, 前掲書, 64頁。)
- 29) 良知力「マルクス=エンゲルスにおける48年革命論の基礎構造」『[共同研究] 1848年革命』大月書店, 1979年, 32-33頁。
フリードリヒ・エンゲルス 村田陽一訳「ドイツの現状」『マルクス=エンゲルス全集』第4巻, 大月書店, 1960年, 37-55頁。